

人類の進歩と幼児教育



牛 島 義 友

一九七〇年は「人類の進歩」を幼児教育の目標として大きく打ち立てる時期ではなからうか。

敗戦後の日本は劣等感に悩んだ時代である。すべてに自信を失い、自嘲と自虐にふけていた。しかし今日はようやく混乱から立ち直りいつのまにか日本が大国の列に加わっていることに気がつき、しかも日本の将来には輝かしい躍進が約束されようとしている。

一人当たりの国民所得もやがて西欧なみになれば人口が多いだけに、世界を動かす大きな勢力になることもたしからしい。科学技術の進歩はこの将来に対する輝かしいヴィジョンをしめしてくれるが、同時に核兵器による人類文化の崩壊の危機が迫ってくる。人類の文化の進歩のためには、核戦争を抑制し排除すること

が絶対に必要である。したがって日本の教育の目標は人類の進歩と核戦争の防止、世界平和におかれるといえよう。

核兵器の廃止は社会の体制の変革だけによってもたらされるとは思えない。核兵器は自由主義体制の中にも、社会主義体制の中にもあるし、また同じ体制の国々の相互の間にも核戦争の危険はある。したがって、しいていえば核戦争肯定の体制と否定の体制といったようなものができればよいわけであるが、現実の政治問題としては考えられず、もっぱら、道徳問題として考えるよりほかなからう。道徳や教育の問題として核戦争反対の態度を堅持する人格を育成し、このような人々が力を得、反対の人々を説得し、いずれの体制、いずれの国においてもこの立場が優勢になるように、たとえ国家や民族の権利が制限されても世界平和の方が

望ましい、という考え方を大部分の者がするようにもっていく必要がある。このような目標から幼児教育を考え直す必要があるのではなからうか。賢明なる日本の教師たちの努力に期待するが、思い付くままのいくつかのサジェスチョンをしてみたい。

一 国際理解の教育

人類の進歩という大きな視野から考えればナショナリズムからインターナショナルリズムへと移行するはずである。ところが現実の世界をみると、ナショナルリズムがいつそう強くなっている。ことに今まで植民地や被搾取的立場にあった新興独立国家では国家主義、民族主義が高揚しており、また米ソのような大国においても自国の権益に関しては、一步もゆずろうとしない。ナショナルリズムの一番弱いのは日本であるといってもよからう。このナショナルリズムは世界平和をたえずおびやかすものである。このナショナルリズムをある程度抑制し、国際連合とか世界連邦を求める考え方が養われねばなるまい。

日本はナショナルリズムに挫折した国であるだけに、ふたたびナショナルリズムの復興に向かうよりはインターナショナルリズムに徹し、世界連邦の礎として努力すべきではなからうか。幼児教育に当たっては郷土や祖国を教えると共に人類愛、世界平和を強調す

べきである。具体的には国際性をもった行事に積極的に参加することが望ましい。幼児教育国際機構に参加したり、ユネスコの行事に参加したり、あるいは幼児画の国際交流、あるいはクリスマスその他の場合に在留外国人子弟との交歓、その他ビオフラの飢饉の援助などにたえず幼児の関心を深めることによって、国際的理解を高めることができよう。

二 奉仕の精神

ナショナルリズムに基づいた世界的関心は世界制覇、八紘一宇、あるいは、いわゆる優越者の立場からの国際的おせっかいになる危険がある。しかし、持てる国、先進国の役割は持たない国、遅れた国のために、自分のものを割くのでなければ世界平和機構はできない。福祉国家では国内の所得の再配分を行なうが、同様に国際的な再配分がなされねばならない。このようなことは経済のみならず、教育文化の領域においても必要であり、持てるものの役割としてみずから進んで人々のため、仕える奉仕の精神を幼児から教えることが必要であろう。

今日是人権とか権制意識のみ強く、奉仕等の個人的善意を軽視し、否定する傾向が強い。イギリスでは権利意識が強いが同時にキリスト教によって奉仕の精神が教えられており、またボランティア

イ・アイ活動が盛んであることを忘れてはならない。権利意識は人の本能に基づいているから、特に教えずとも体得されるが、奉仕の方は教えられなければ身につかない。

三 異質集団での経験

このような精神を養うには優秀児だけを集めた集団とか、せいまい地域の子どものだけの集団ではなく、能力や生活環境を異にした人との接触の経験が必要である。虚弱児や肢体不自由児、あるいは精薄なども普通の人の中で教育されるのが一番望ましいのである。ただ彼らは普通児からいじめられたり、一般教育から放置されるから特殊教育が必要になってくるので、普通児が彼らを快く迎え、まためぐまれない子どものために世話したり、自分の学習を、教えてもできない子どもに教えてやりたりすることがかえってほんとうの教育になることを理解させるならば、この混合集団の方ができる子にとってもできない子にとっても望ましい教育環境になる。これは、家庭の中でも社会の中でも同じである。社会から分離した教育でなく、社会の中に操り入れた教育や生活指導が望ましい。このような異質的なものと共に生活する訓練が必要であろう。アメリカは黒人をその社会の中に持っていることはやっかいなことではあるが、世界平和のためにはかえって望まし

く、この問題をみごとに解決することによって国際的先進国としての役割を果たしてほしい。日本人も常に東南アジア、アフリカの人々を自分たちの社会に包含される人として考える態度が必要であろう。

四 同じ言葉で交わる

このような異質的な人、特に国際的にちがった民族の人たちと協同して世界連邦をつくるには、同じ言葉で語り合うことが大切な条件となる。すべての人が、母国語のほかに共通の国際語を身につけていることが望ましい。このためには国際語（具体的には英語）を幼児期から教え、できれば二重言葉にしておくのが、一番効果的である。学習能力からいえば一つの言葉が固定しない中にもう一つの言葉を習得させるのが望ましい。このことは考え方、発想法にも共通性が出てきて、共通の理解に役立つであろう。以上の諸提案はかなり大たんな粗雑な意見かもしれない。言葉の問題にしてもすぐ反対意見がとび出すであろう。しかし真の人類の進歩、世界平和を目標として、いかなる人間形成が望ましいかを自分たちの問題として考えてほしいものである。これが新しい年の日本の幼児教育者の課題として、ふさわしいことではなからうか。